

# SCOPEⅢ

No. 3

愛知教育大学教育創造開発機構  
教員養成高度化センター  
教科教育学研究部門

教員養成高度化センター  
〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1  
電話： 0566-26-2316

編集責任者：生活科教育講座 野田敦敬  
美術教育講座 松本昭彦

## はじめに

教員養成高度化センター

教科教育学研究部門 兼担教員 野田敦敬

平成24年4月1日より、大学教育・教員養成開発センターは、教員養成高度化センターと大学教育研究センターの二つのセンターに分かれました。教科教育学研究部門は、教員養成高度化センターに属することになりました。「SCOPEⅢ」は、引き続き当部門から発行することになります。

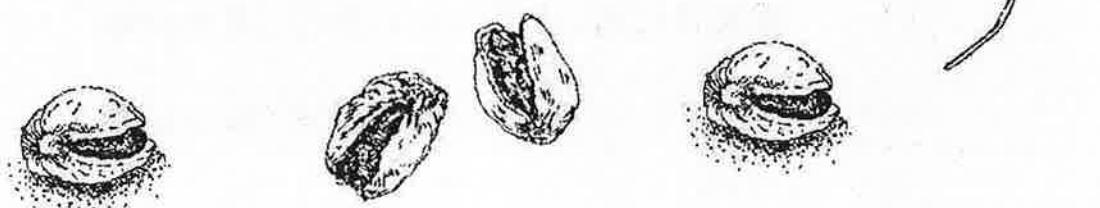
さて、今回の特集は、「教育実習に期待すること」としました。毎年に秋に4週間行ってきました主免実習が、本年度は、3W+1Wとなり、平成25年度から3週間化（幼稚園実習と養護教諭実習は除く）されることになりました。量的には短くなり、質的な保障をしていくことが、今後の課題となる。

そこで、各教科等から1名ずつ、自身の教育実習から得たこと、教育実習で身につけてほしい資質、能力、姿勢等、あるいはそれらを身に付けさせる方策等を執筆していただきました。ぜひ、今後の教育実習指導の参考にしていただければ幸いです。

## 目次

- 3頁：平成24年度教科教育学研究部門活動報告（社会科教育 船尾日出志）
- 4頁：教育実習に期待すること（美術教育 樋口一成）
- 5頁：子どもたちの生の声をとらえること（国語教育 砂川誠司）
- 6頁：教育実習に期待すること～保健体育科保健分野の視点から～（養護教育 山田浩平）
- 7頁：経験の少ない実習生に何を経験させるか（理科教育 大鹿聖公）
- 8頁：床に這いつくばって雑巾がけせよ（保健体育 森 勇示）
- 9頁：英語教員養成において教育実習に期待すること（外国語教育 藤原康弘）
- 10頁：教育実習に期待すること（音楽教育 新山王政和）
- 11頁：教育実習を充実させてために（技術教育 岳野公人）
- 12頁：教育実習生の授業の課題と大学の授業改善（社会科教育 真島聖子）
- 13頁：自分の授業を振り返る（家政教育 伊深祥子）
- 14頁：教育実習に期待すること（数学教育 高井吾朗）
- 15頁：教育実習に期待すること（幼児教育 新井美保子）
- 16頁：教育実習に期待すること（理事／副学長 都築繁幸）

\* イラストは、美術教育講座の松本昭彦教授及びゼミの大学院生によるものです。



## 平成 24 年度教科教育学研究部門の研究活動報告

社会科教育講座 船尾日出志

下記のように定期的に研究会を開催し、それぞれのテーマについて活発に論議した。原則として教科教育共同研究室（教育臨床総合センター3階）を会場とした。

4月 18 日（水）17 時 00 分～

- ① 平成 24 年度教科教育学研究部門の役割分担（月例研究会【大学・附属学校共同研究会代表者会を含む】の計画と運営、SCOPEⅢの編集、大学・附属学校共同研究会報告書の作成、機構紀要の編集委員、教科書の整備と購入、教科学の研究協力、その他【シンポジウムの計画実施等】）の決定
- ② 教育実習の改革について：教育実習研究部門の先生方にも出席いただき論議

5月 23 日（水）17 時 00 分～ 教育実習研究部門と合同で実施

本学の教育実習の改革について：教育実習研究部門の先生方から話題提供いただき、活発に論議した。さらに継続して論議することを確認した。

6月 20 日（水）17 時 00 分～

大学・附属学校共同研究会代表者会と部門の研究会を同時開催

- ① 平成 24 年度大学・附属学校共同研究会の運営について確認（報告書の作成、運営費、8月 8 日 15 時より原則として一斉分科会を行うこと等）
- ② 本学における教育実習の在り方についての論議を前回に統いて行った。その際、附属学校による実習生への指導案指導の実態を示す資料が提出された。

7月 25 日（水）18 時 30 分～ 知立にて情報交換会

9月 29 日（土）13 時 30 分～ 有田和正先生講演会 於：411 教室

教員養成高度化センター主催、教科教育学研究部門企画によって「教師を目指す学生・院生に贈る言葉（そして、若手教員への助言）」というテーマで、東北福祉大学特任教授の有田和正先生にご講演をいただいた。120 名の出席者があり、大成功であった。

10月 24 日（水）17 時 00 分～

教員養成キャリアプロジェクトに中心的に携わっておられる生嶌亜樹子先生と首藤貴子先生より「教員養成キャリアと教員の資質能力の関係に関する調査（中間報告）一聞き取り調査による学部卒教員・修士課程修了教員の育ちの実態一」に関して話題提供をいただいた。実際の聞き取り調査の様子をビデオ映像にみながら有意義な論議ができた。

11月 28 日（水）17 時 00 分～

「今年度主免実習に参加した哲学専修の学生へのアンケート結果から見えること」、「今年度主免許実習に参加した小免コース院生からの話題提供—教科教育の授業に期待すること」という 2 つの話題提供をふまえて、「教科教育関連講義で、学生に何を学ばせるのか」というテーマでフリートークを行った。さらに担当理事から要望されている事前指導の改革案を検討した。

1月 23 日（水）17 時 00 分～

平成 24 年 10 月に赴任されたばかりの砂川誠司先生（国語教育講座）より「国定期国語教科書における写真教材の役割」というテーマで報告をいただいた。さまざまな視覚的資料も提示されたこともあり、有意義な質疑が熱心に展開された。

2月 27 日（水）18 時 30 分～

今年度の反省と次年度の計画等について話し合い、そのほか情報交換を行った。



## 教育実習に期待すること

美術教育講座 横口一成

大学での授業や教育実習に加えて、学外での教育活動や「なごや教師養成塾」「岡崎教師塾一允文館(いんぶんかん)」等の教師養成制度への参加など、学生たちは普段から様々な機会を有効に活用しながら、教師となるために必要な知識・技術の習得や教育的な体験の積み重ねを行っています。それらの中には、教育実習の価値は、学生たちが夢見ている教師という職にすでに就いている先輩の教師の方々から実際にいろいろなお話を伺えるというところにあります。

今年度、主免実習に参加した美術選修と美術専攻の3年生に教育実習後に書いてもらった教育実習のアンケートの中にも、次のような記述がありました。「教育現場を体験することができて、教師という仕事がどのようなものであるか、また授業以外の仕事についても知ることができた。」「指導してくださった先生の姿を見ていて、教師という職の魅力を強く感じた。」「先生方が授業のために多くの時間を費やして準備をされ、授業を如何に工夫されているかということがよく分かった。」「指導してくださった先生が、教科やクラスのこと以外にも、人間としての生き方や考え方などについてもいろいろと話してくださいました。」「私自身にとって学ぶ点がとても多かった」。このアンケート結果を見たとき、日頃から実習生をご指導いただいている先生方が、教育実習という短期間の中でも、教科や教材研究に関する指導だけに留まらず、教師として、また社会人として学生たちが将来どのように生きていくべきかといった点にまで踏み込んで、いろいろなお話をうながすことを知りました。

教育実習の本来の目的は、教育現場において教育の実際を観察し、また教育実習生として学校における教育の諸活動へ積極的に参加することによって、教師の仕事や使命を理解し、学校教育全体の構造を認識するとともに、子どもたちを理解したり指導上の問題を把握したりすることができる知識や技術を身に付けられるようにすることです。そして、その教育実習は、実習生にとって、将来教師となる夢を実現するための意欲や情熱を沸き立たせてくれる機会でもあります。同時に、自己の現在の力を確認することができ、またこれからどのような学びが必要かといったことを確認することができる機会でもあります。

教育現場の状況が大きく変化し、教育現場での問題が多様化し、複雑化してきた現状を考えたとき、実習生が教育実習期間に学ぶことができる内容は、教育の現状から考えると非常に限定的なものと言えます。限られた実習期間の中でも、教育実習の本来の目的に沿って、実習生は多くのことを学びますが、教師としての先輩でもあり、社会人の先輩でもある実習校の先生方と出会い、その先生方の生き方や考え方についてのお話を聞かせていただけるという機会は、教育実習の他には数少なく、たいへん貴重なものと言えます。来年度から主免実習の期間が3週間化されてさらに短期間となりますが、学生たちには、専門教科や研究授業のためだけに多くの時間を費やすのではなく、実習校の先生方との出会いを大切にするとともに、先輩の教師や社会人としての生き方や考え方を始めとして、学校や児童生徒の普段の様子など、いろいろなお話を実際に伺うことができる貴重な機会を大切にして欲しいと思います。



## 子どもたちの生の声をとらえること

国語教育講座 砂川誠司

子どもたちが難しそうな顔をして一生懸命考えてくれている。教師からの「問い合わせ」になんとか答えようと彼らは必至だ。担任の先生から、実習の先生を困らせないようにとうんざりするほど言われているせいもある。自分たちがよくできるところを見せたいという思いもあるのかもしれない。とにかく彼らは一生懸命考えているのである。教科書をめくって答えを探そうとする子、教師の方を向いてヒントを待つ子。記憶を辿っているかのような顔をしている子もいる。けれども彼らの答えはなかなかまとまらず、教室は沈黙に支配された。

たくさんの答えが活発に出ると思い込んでいたのが今ではとても恥ずかしい。どのくらい沈黙の時間が経ったのか、はつきりとは覚えていない。おそらくたいして長い時間でもなかつたはずなのだが、わたくしは沈黙に耐えきれず、「問い合わせ」の答えを、いわゆる「正解」を、いかにも説明的に語り出したのだった。わたくしの教育実習での一番初めの発問、そして一番初めの授業は、こうして失敗に終わった。完全に準備不足だったと反省し、自分を責めた。

ところが、実習の終わりに子どもたちが粋な計らいでわたくしにくれた色紙には、あの授業がいちばん面白かった、勉強になったなどと、到底信じがたく目を疑いたくなるようなことが書いてあった。実習のあいだには一言もそんなこと言っていたなかったのに、どこまで気を遣ってくれる子たちなのだろうか、憎いなあ、とも思ったが、どうやら子どもたちにとっては一生懸命考えたことがよい経験になったようだった。今思えば、もっと沈黙の時間を作つてやつてもよかったのかもしれない。黙って思考をめぐらす時間を設けることも大切なことなのだと、ようやく気づいたときには、実習は終わっていた。ほんとうに苦い思い出である。

結局のところ、わたくしは、子どもたちの思考を、最後までしっかりと扱うことができなかつたのだった。もしかすると教育実習のような短い期間にそんな余裕などないのかもしれない。だが、授業というものは、とくに国語の授業は、「問い合わせ」や「課題」に答えていくことで成り立つという性格をもつている。それらに答えていくなかで、子どもたちは思考したり表現したりしながら、自らの世界を広げていくのである。ことばを使って、世界とのつながりを築いていくのである。だから「問い合わせ」や「課題」を工夫し、授業の目標に向かって子どもたちの考えをいかに扱うかということは授業作りにおいて重要な位置を占める。それは実習生に限らず、国語教師にとって、いつまでも悩ましい点であり、また、面白さを感じる点でもある。

ちょっとした発言（わたくしの場合は「沈黙」だったが）の中にも子どもたちの思考が詰まっている。おそらくほとんどの実習生にとってはじめて出会うそれらを鋭く見抜くことは簡単なことではない。はじめてだからこそ、とまどいや不安もある。けれども教師としての力量を形成する要素のひとつは、そうした子どもたちの生の声を捉えることにある。ほんとうの子どもたちに出会い、ほんものの子どもたちの考えに出会う場で、そうした生の声をしっかりと捉えようとすることが大事なのだと思う。もちろん最初から鋭く捉えられなくたっていい。わたくし自身の経験を正当化するわけではないが、いろいろな「問い合わせ」や「課題」をもつて子どもたちの反応を見、考えていけばよい。そういう姿勢でのぞんだ経験が、将来、授業を営む力として生かされていくのだと思う。



## 教育実習に期待すること — 保健体育科保健分野の視点から —

養護教育講座 山田 浩平

教育実習では、学生はこれまでの教えられる側から教える側へと立場が変わり、大学での学生生活とは異なった社会人としての規律が必要となる。具体的には、服装や言葉遣い、態度、時間管理など様々な要因に注意を払うことになる。教育実習は、大学教育の単位の一つであると同時に、教師として生徒に50分間の授業を保障しなくてはならない。したがって、授業に責任を持って取り組むとともに、学習指導案作成等の準備段階から自分がこれまでに身につけたことのすべてを出せるよう全力で取り組まなければならない。授業のうまい下手よりも大切なことは生徒たちに自分の教えたいことを精一杯伝えようとする姿勢である。この姿勢が生徒に対しての責任の一翼を担うことになる。

体育の授業では様々なスポーツを教材にして授業が展開されており、自分が部活動等で行っている得意なスポーツだけでなく、幅広いスポーツ種目に対して関心を持ち、授業では生徒に対して積極的に示範を行う必要がある。これに対し、保健の授業は体育以上にこれまでの勉強の成果が顕著に現れる。中学校では2002年の学習指導要領の改訂以降、中学3年間での授業の時間数が以前の55単位時間から48単位時間（程度）に減少した。また、単元も以前は5つの領域から構成されていたが、現在は「心身の機能の発達と心の健康」、「健康と環境」、「傷害の防止」、「健康な生活と疾病の予防」の4つの領域に再編された。このように保健の授業時間数は減少し、単元も再編されたものの、その一方で教員の資質向上を目指して教育実習の単位は増加傾向にある。本学では2013年より保健の免許取得のための実習は以前の4週間から2週間に減少するが、この限られた時間の中で保健の授業を実施できるか否かが鍵となる。これまでの研究報告によると、教育実習が4週間時期の中学校における保健の授業の平均担当時間は4.42時間（±2.39）であったが、実習期間が2週間になるとこの時間数を確保することは困難になる。そのため、学生は限られた授業の時間数の中で、単元に対して教材研究を十二分に行い授業に望む必要があり、それに対して学校現場の指導教官にも指導を期待するところである。

保健の授業は生徒が健康生活を送るための「生活者づくり」を最終目的としているが、どうしても一方的な単なる知識の伝達になってしまいがちである。これでは、聞く方は一応は素直に聞くものの、結果として健康行動の獲得に結びつかないというのが現状である。こうした知識と行動の狭間にある「心」に働きかけて、いかに揺さぶり、突き動かすか、これが保健の授業のキーポイントとなる。「わかつちやいるけど止められない」という心のあり様を、「大切に！」という道徳教育やスローガン解説することが肝要となる。今後は、性、指導内容を明確にした上で、教材による大学で指導していくとともに、学授業を確保し、指導していただくこと



脅しや一方的な指導ではなく、「心を」とでもなく、科学的なアプローチで保健分野としての固有の目標や方向研究を行って授業を展開でき校現場でも少ない時間の中で保健のを期待する。

## 経験の少ない実習生に何を経験させるか

理科教育講座 大鹿聖公

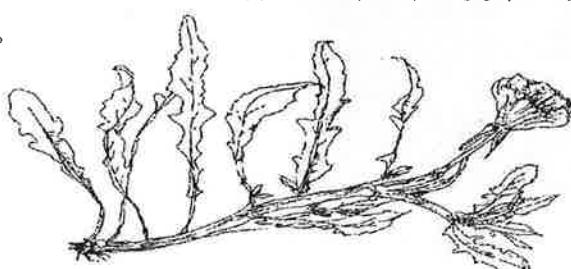
新しい学習指導要領による教育課程が本年度の高等学校を含めて全ての学校段階で完全実施となった。その中で、「ゆとり教育」の教育課程の中で育った学生が実習生として教育実習を体験する事態となった。加えて本学では、従来4週間であった実習期間が3週間へと短縮されることとなり、実習生が教育実習で学ばなければならないことを短期間に集中して習得しなければならない状況となっている。

本学では実習生が教育実習で学ぶ項目として、実習態度、生徒・生活指導、学習指導の3点が挙げられている。当然、実習期間を通してこれら全てを総合的に体験・習得することが期待される。このうち実習態度は、学生自身の学習に対する姿勢、意欲であり、このことはむしろ普段の大学生活の中で培うものである。また生徒・生活指導についても、教師としての経験を経ていく中で学んでいくものである。そのため、教育実習で優先して学ぶべきことは学習指導であると考える。教師の職務は多様であり、実習期間でさまざまな事項を学ぶことになるが、教師の本分である授業について、子どもを相手にどのような授業を実践するか、そのために、どのような準備をし、どのような手法を計画し、具体的にどう実施するかを第一に経験すべきであると考える。

理科であれば、自然科学に関するさまざまな科学概念や科学知識を、具体的な事例や事物を題材として、授業を構成することが求められる。大学で講義や演習、実験を通して学んだ知識や能力を、いかにかみ砕き、いかに具体的に、また、日常生活の中から事例をとり出して教材を開発し、授業として構成するか、また、そのように入念な準備をして行った授業が、子どもたちに教育的な効果を与えることができたかを反省する必要がある。このことに全勢力を傾けて取り組むべきである。実習期間に行える教科や単元は限定的であり、必然的に不足している。しかしながら、教科の専門知識を授業で活用する知識とする方法を学ぶことで、それ以外の教科や単元での授業への取り組みは確立される。この手法は、画一的なものではなく、教師一人一人異なっている。自分のスタイルを見いだすためにも、実習校において、多くの教師の授業を観察し、自分に合った手法を見いだし、授業スタイルを確立することが重要と考えられる。実習を通して計画して実施した授業を、担当する実習校の指導教員やその他多くの教員により評価を受け、伸ばすべきところは伸ばし、修正すべき点は大いに修正する。その繰り返しにより実習生が授業におけるスタイル確率の一歩を踏み出すことが重要ではないだろうか。

このように、限られた実習期間における実習をより有意義に、有効に行うためにも、大学においては、教科に関する専門知識をただ漫然と習得させるのではなく、学校教育の内容と関連させた知識や、実験観察を獲得させるべきである。

現在、大学に在籍する学生は「ゆとり世代」の学生であり、高等学校までに学習した学習内容がきわめて限定的で、教科の専門知識も観察実験の体験、経験が最も少ない世代である。そのため、新しい教育課程で必要となる教えるべき知識や技能を十二分に持ち合わせていない。そのためにも、これらの知識が学べるよう大学での準備を充実させるべきである。同時に、限られた実習期間での教材研究、授業指導を有効に実施させるために、実習の事前指導において実習における事前の心構えならびに授業計画立案の方略などを附属学校等の協力を得ながら、大学の教員が一丸となって十二分に準備させる必要があると思われる。



## 「床に這いつくばって雑巾がけせよ」

保健体育講座 森 勇示

教育実習は「実際の子どもたちを相手にする」「朝な夕なの教職の実務を知る」「授業実践を反省する」という点で大学での学びと大きく異なる。

実際の子どもたちを相手にするので、少しでも子どもと触れあう機会を持つべきである。そんなとき、実習ノートを書いていてはもったいない。朝は朝練習と一緒にやり、教室に早めにいって子どもに「おはよう」と元気よくあいさつし、給食は一緒に食べ、掃除当番は床に這いつくばって共に雑巾がけをする。帰りのホームルーム終了後、ちょっとだけ教室に残って子どもとおしゃべりしながら掲示物を直す。すると寂しい子の実態が分かり、子どもの「本音」を聞いたりすることができる。つまり、現職の先生方が実際にやっていることになる。教育実習生は若い。そのため、子どもが接近してくる。その点のみ現職の教師に優る。教育実習生のうちから子どもが接近しないようでは先は暗いと思った方がいい。接近されないときはこちらから接近する。

朝な夕なの教職の実務は夕方の職員室にある。ノートを点検し朱書きで返答する教師、部活で大声を張り上げている教師、書類づくりや会議に忙殺されている教師、様々な教師を垣間見ることになる。そうなると「教材研究できる時間」がいかに貴重か分かる。どの実務もスピード感が大事になる。ノート PC での文書作成・表計算は必須能力としてスピード感を高めるべきである。スピード感は仕事の経験量に比例する。練習で高まるのでなく実務の量が高める。

教育実習で模擬授業というのが私の考え方である。大学の模擬授業は学生が教師役、学生が生徒役になり、どれほど苦労しようとも「茶番」の域をでない。教育実習こそ、学生が教師役、(本当の)子どもが生徒役の模擬授業になる。「あんなに苦労したのに模擬授業とはけしからん。」と叱られても、現職教師の「真の授業」と比べれば、教育実習生の授業は模擬授業に過ぎない。ときどき「先生、教育実習で研究授業がうまくいきましたよ。」という勘違い学生の感想を聞く。子どもに助けられたともつゆ知らず。本当かどうかは試験受かるから教室でやってみれば分かる。

体育の場合、子どもの統制にこだわる考えが根強い。そのため、集団の規律で指導力ととらえられてしまうことも多い。過度な規律は運動学習場面を損なう。熟練教師の中に統制は優れているが運動の学習指導ができない教師がいる。教育実習生は、例えうまくいかなくても荒削りでもいいから、一人でも運動学習を指導できるようあってほしい。指導案通りいくかどうか気にしていると子どもは見ずに時計を見ることになる。子どもの動きを見て感じ指導してほしい。見ても感じないとき、指導

助言ができないとき不勉強を身にしみて思い、学生生活に反映させてほしい。愛教大の学生は、基本はじめだが、まじめ過ぎると、この世界長続きしないことも多々ある。子どもを見て感じ思う感性を磨くべきである。そのためにも床に這いつくばって廊下を雑巾がけしてほしい。



## 英語教員養成において教育実習に期待すること

外国語教育講座 藤原 康弘

現在、英語教育は、好もうと好むまいと、所謂「国際化」や「グローバル化」の波、それを受けた政界、財界からの期待もあり、大きな変更が求められている。2011年度には小学校高学年において「外国語活動」（英語）の必修カリキュラムが開始され、2012年度には中学校で授業時間数が1時間増えるとともに、小学校で育成されたコミュニケーション能力の素地を踏まえて4技能の総合的な育成が重視されることとなった。更に、来年度、2013年度には高等学校で4技能の統合的な指導を可能とする授業内容の改変、またそれを達成する方法論として「授業は英語で行うことを基本とする」カリキュラムが開始される。尚、大学英語教育においては、文部科学省の施策によれば、入試を4技能を総合的に測り得る内容へ変更すること、大学卒業時に「仕事で英語が使える」程度の水準を達成することが求められている。

付け加えて、各市、及び個別の大学レベルでは、小学校1年生からのフォニックスによる英語授業の開始、中学校卒業時に英検2級から準1級程度（現行の国レベルの判断では、英検3級程度）の英語力の育成を目指すことや、大学の専門教育の一部を英語で行うコースを設置するなど、賛否はあるど、大きな改革案まで出されている。つまり、日本の英語教育は、初等教育から高等教育まで、全ての段階で現在大きな転換期を迎えていると言って良いだろう。

その現状の中、英語教員養成において、教育実習にて本学学生に身につけてもらいたい、また実習先の先生方にご指導賜りたいことは、「自身の未熟さを認識し、日々努力する姿勢」である。まだ教員キャリアがさほど長くない筆者が述べるのも恐縮ではあるが、教員という仕事は、初任者、中堅、ベテランと一様に進みながらも、日々「向上心」があるか否かが、後の決定的な教員キャリアの質の違いを生み出すと思われる。とりわけ、言語学習は母語の日本語であれ第二言語の英語であれ、“lifelong endeavor”である。現在、文部科学省は英語教員に求められる最低限の英語力を明示はしているが、機や場を逃さず、個々の児童生徒に対応し得るコミュニケーションを可能にする英語力は、それほど簡単に身につくものではない。もとより母語である日本語でさえ、授業を円滑かつ効果的に進める言語使用は容易ではないのである。英語という言語の教師である以上、テスト等で測られ得る無機的な英語力のみならず、児童、生徒の人間理解をした上でコミュニケーション力が求められる。そのためには、教員キャリアの前段階の教育実習時に、現状に甘んじない姿勢、具体的には人生を通した人間理解の必要性、英語学習、習得の必要性に気付いてもらえたと願う。教育においては、言うまでもなく、言葉のみならず、教師の姿勢自体で多くが伝わる（伝わってしまう）ことを忘れてはならない。

教育とは「バトン」渡しと言われる。今の教育実習生が後に教壇に立ち、次代を担う児童、生徒を指導する。そして、その児童、生徒の中の教員志望者がまた教育実習生となる。自分が以前に揮受した指導（バトン）を、できればそれ以上のものにして、このバトン渡しを続けていきたい。



## 教育実習に期待すること

音楽教育講座 新山王政和

多くの学生が真面目に実習へ取り組んでいるため研究授業後の話し合いも本気モードになることが多く、「あなたへ伝えられる機会は今日しかないから」「次に教師として子どもの前に立つ時は本番だから」などの言葉を添えながら次のようなことを話します。

次に教壇に立つ時は子どもに対して責任を負う本物の教師として全てを切り盛りする「本番」で、実習以外の場で自分が中心になって授業を行う機会はほとんど無いこと。そして、失敗をフォローして下さったり実習後にやり直しをして下さったりする指導教員はいないこと。自分自身の授業や学級経営、児童・生徒・保護者の対応、校務分掌や部活指導などをこなしながら、あなたと一緒に考えて下さったり、あなたを親身に見守って下さったりする指導教員もいないこと。これらを話すと肩を落とされる方もありますが、私にも多くの失敗体験とそれに対する反省に基づく僅かな蓄積があるので、学生には少しでもいいからそれを盗んでほしいと願っています。

研究授業をチェックするポイントは次のとおりです。生の子ども達のリアルな反応を伴う現場実習でないと想定しにくいものばかりで、いずれも教師自身が持つべき「説明力」「説得力」「言い換え力（変換力・翻訳力）」などが求められます。豊富な経験を持つベテラン教師の蓄積を真似し盗むだけでなく、若い教師がどのようにして経験を積んでいるのか、その方法に気付き、見付けて、それらも盗み取ってほしいと願っています。

### ① 「リアクション」

誉めたり驚いたりして子どもの発言を受け入れているサインやメッセージを出し、誘導尋問的に子どもの思考を導く。「いいこと気づいたね。どうやって気づいた？」「凄いなあ、なんでそう思った？」など、チェーントークを導くための繋ぎの言葉を身に付ける。

### ② 「指示は3回以上」

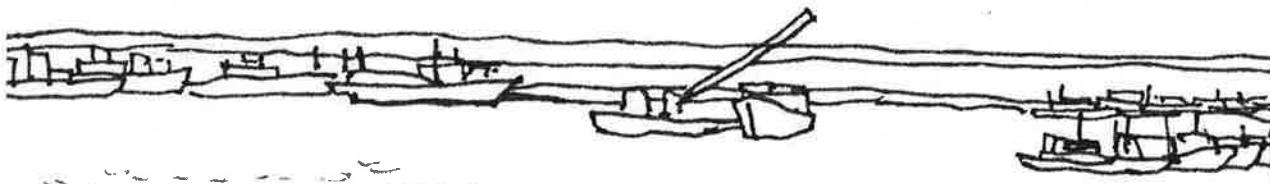
収束（一斉）から拡散（グループや個人）へ変わる際、今から何をやるのか説明した後、「いいですか、今から〇〇をして貰いますよ（2回目の説明）」→「はい、それでは〇〇をしましょう（3回目の説明）」のように、最低3回は子どもへ説明＆指示する。「〇〇さん、今から何をどうすればいいんだっけ？」のように、子ども自身の言葉に置き換えさせて（子ども目線で翻訳させて）、他の子どもにも分かるよう全体へ説明して貰う。

### ③ [焦点化]

何をするのか？、何についてどうなるように考えるのか？、何をどうするために工夫するのか？、何について話し合っているのか？、音楽の何を聴くのか？、何をどのするために練習しているのか？、などのようにどんな場面でも焦点化を徹底する。

### ④ [共有化・共通理解化]

気付いたことや考えたことなどの様々な意見を引っ張り出して、例えば「そんな風に考えたんだ」「あーゆう言い方があるんだ」「それだったら先生も気づいたよ」「それって〇〇が違うってことだよね」などのように教師から発言者へ問い合わせことで、クラス全体へ他者の考え方や意見を知らせ、どうやってその意見を考えたのか思考のプロセスを紹介することで自分の意見と比較したり分析したりする共有化・共通理解化を促す。



## 教育実習を充実させるために

技術教育講座 岳野公人

愛知教育大学の主免実習において、学校現場に滞在する期間が3週間と短縮されることで、今後学内はもとより、各関係機関に影響を及ぼし、さまざまな対策や改革が行われることが予測される。一般的には、短期間で、より効率よい教育実習の実現が期待されるところであろうし、その中でどのように意義ある教育実習を実現させるかについて、より具体的に議論していく必要がある。

2012年度の教育実習を終えた技術教育講座の学生14名に、3週間化になることによる学生自身に対するメリット・デメリットを自由記述形式で回答を求めた。メリットについては、「体力的、労力的、精神的に楽になる」、「短期間で集中できる」などの回答があった。またデメリットについては、「子どもたちとふれあう機会が減る」、「1週間分の経験が減る」、「授業時数が減る」などの回答があった。学生の考えるメリットは、担当校への配慮と同様に、学生自身の負担軽減もあるようである。デメリットは、当然であるが経験の減少になる。さらに学生に、次年度以降の学生へのアドバイスについて、回答を求めたところ、「始まる前にしっかりと準備する」、「効率よく仕事をする」、「積極的に子どもとふれあうことを意識する」などを提案していた。

現時点では、3週間化されることで、大学側もその対策を検討しているところである。教育実習は、事前指導、教育実習、事後指導で構成されているが、大学側で教育実習を充実させるために、事前・事後指導のさらなる改善が求められている。また、学習指導案のデータベースをはじめ、自己学習の整備も進んでいる。しかし、「子どもとふれあう経験」を増加させることは困難であり、このことこそが、学生の考えている大学の講義では得られない実体験なのだろう。

また、教育現場の教員の方々にも、十分に意見を収集すべきであると思う。教育実習において、学生に学んで欲しいことは、子どもとふれあうこと以外にも多くのことがありそうである。地域の大学としては、教育現場と連携をとり、教育実習を充実させていくことも重要であると思われる。今後も、ますます、教育現場の教員の方、学生と意見交換をする機会が増えればと期待している。

学生は教育実習後の1~2週間は引き締まった顔で講義を受講しているが、しだいに、もとの大学生にもどってしまうのを見ると残念な気になる。これは、個人的な課題であるが、これも意見交換したいことである。



## 教育実習生の授業の課題と大学の授業改善

社会科教育講座 真島 聖子

最近私は、教育実習生の授業を参観する際、実習生の授業の問題点を自分の授業の問題点として捉え直し、大学での授業改善に活かすようにしている。実習生の授業の問題点を実習生だけの問題にするのではなく、日々大学で授業を行う大学教員の責任として引き受けることで、大学の授業と教育実習生の授業の質の向上をめざしている。以下には、これまで参観した教育実習生の研究授業の課題を整理し、大学の授業における改善策を述べる。

教育実習生の授業の合格ラインは、「実習生のために積極的に授業に参加しよう」とする姿が子ども達に見られるかどうかだと私は考える。実習生個人に起因する個別具体的な授業の問題点は、実習生自身が自覚し、今後経験や勉強を積み重ね、改善していく必要がある。一方、実習生の授業に見られる共通の課題は、大学の授業を通じて改善に努めなければならない。実習生の授業に共通する課題は多岐に渡るが、その中でも特に顕著な課題は次の3点である。第1に、本時のねらいを授業者本人が十分に把握できていない点、第2に、単元構想における本時の位置付けが不明確な点、第3に、教材研究が不足している点である。これらの課題は、子どもの実態把握が不十分な上に、学習内容の理解も不足しているため、何を授業のねらいとすべきか、どのような単元を構想する必要があるのか、ねらいを達成するためにどんな教材を使用すべきなのかが不明確なまま授業を実践していることによる。そこで、大学の授業では、授業の最初に、2社の教科書の比較分析を通じて、それぞれの教科書が何を学習の中心に据え、どこを重視し、どんな活動や授業の展開を想定しているのか、教科書会社の意図を読み取らせる学習を導入した。その上で、1時間の指導案を作成する際、授業のねらいである主発問を明示するように指導した。さらに、単元構想を作成する段階で、単元を通して身に付けさせたい能力や態度を明確にさせた上で、単元における本時の位置づけを考えさせた。また、授業のねらいに沿った教材を吟味し、作成する時間を確保した。最後に、総仕上げとして模擬授業の発表を行い、発問や板書や机間指導も含め、教師役に徹して授業するよう指導した。

実習生を受け入れるにあたり、実習先の校長先生から、「学校の教員は、誰もが教育実習を経験しています。教育実習生を受け入れて育てるのは、教員の使命です」というお話を伺った。このような発言から、「自分が受けた恩を次の世代にお返しする」という意識の高さ、懐の深さ、教育者としての温かさを感じた。また、実習生を直接指導する先生の中には、「自分も勉強になります」と実習生の指導を肯定的に捉え、自分の指導力の向上やスキルアップにつなげて考える先生もいる。このような現場の先生方の誠意に応えるためにも、実習生を送り出す側の大学教員として意識を高く持ち、今後も大学の授業の改善に力を尽くしていきたい。



## 自分の授業を振り返る

家政教育講座 伊深祥子

出前授業で蒲郡の中学校を訪ねた時のことである。前回の授業では子どもが本当に思っていることを十分言えていなかったのではないかとゼミで議論され、デイベートをさせてはどうかという提案がされた。授業者は「子どもの声が聴けるなら、私、何でもやるよ」と急遽授業の中にデイベートを組み入れることになった（デイベートといつても本格的なものではない）。これまでの指導案にはない展開で大丈夫かと心配であったが、挑戦することになった。授業の内容はプリンの比較である。市販のプリンを2種類用意し、味や価格、原材料を比較して自分だったらどういう理由でどちらを選ぶかという食品選択の授業である。授業者は、今日はデイベートをやるぞと意気込んでいたが、2種類のプリンが配られると子どもたちは熱心に2つのプリンを比較し始めた。前回の授業では見られないほどの熱心さである。においを嗅いだり、手で持って重さを比べたり、製造元はどこか、カロリーの差、パッケージの違いなど熱心に比べている。プリンの比較をしたらすぐに2つに分けてデイベートに入る予定だったが、こんなに熱心に調べているのに発表させないわけにはいかなくなってしまった。そこで授業者が示した比較のポイント以外にどんなポイントで2つのプリンを比べたのかを発表する時間をとった。子どもが比較したポイントを発表してから無事デイベートを実施することができた。授業の場での子どものようすで授業の計画は変わったのである。授業はその時間、その教室で、その子どもたちと何をどう学ぶことができるかというLIVEである。事前の指導計画どおりにすぐデイベートに入ることはできなかつた。

教育実習は1時間の出前授業よりは長い期間である。3~4週間の子どもたちとのLIVEに参加することである。十分準備してもうまくはいかないし、やり直しもきかない。思ってもみないことも起きるだろう。でもLIVEを楽しんでほしいと思う。子どもたちと共に過ごすその時間、その場所、その出来事を自分の感性で感じることが大切なのではないかと思う。子どもの声を聴くとか、子どもをよく見ることだけでなく、いっしょに過ごす空気感を味わってほしい。教育実習でプリンの授業のようにその場で授業を変更するのは難しいことである。大切なのは授業を終えてから、その授業が子どもたちにとってどんな授業であったのかを指導の先生や仲間たちと振り返ることである。良い授業、悪い授業と批判するのではなくて、授業の事実を振り返ることがつぎの授業に繋がっていく。

教師という仕事は子どもにさよならを言う仕事だと思っている。教師が子どもと過ごすのは1年か2年、長くても3年である。その限られた時間を子どもたちとどんな風に過ごして、何を学ぶのかが教師の仕事である。そしてさよならを言うのである。教育実習は3~4週間という期間ではあるが、同じである。その時間を子どもとどう過ごすのか、その時、その場で自分の感性で感じ、どんなLIVEができるのかが教育実習での学びではないだろうか。



## 教育実習に期待すること

数学教育講座 高井 吾朗

これまで4週間で行われてきた主免実習が、今年度3+1Wという形で実施され、来年度からは、3週間化されることになりました。これについて、期間が短くなつても大丈夫、他の部分で補えば大丈夫という言葉をいくら言ったとしても、実習生が児童や生徒達と一緒にいる時間を1週間分奪われているという事実を隠すことはできません。

私が教育実習に行ったのは10年前であり、愛知教育大学の観察・参加・実習という実習形態ではなく、初日から授業を受けもつというものでした。指導案を書いては模擬授業を行い、指導案を修正し授業を行う、これを毎日のように繰り返し、放課後は担当していたクラスの文化祭の練習（ダンスと劇）に顔を出し、さらに口を出していました。

その4週間を経て感じたことは、授業に対する評価が変化していったということです。授業が終わったときに、私は子ども達に毎回のように「授業わかった？」と聞いていましたが、最初は自分が上手くいったと思っていても子ども達は首を捻っていました。しかし、4週間目になると自分が上手くいったと感じていると子ども達もわかったと言ってくれ、失敗したなと思ったら、わからなかつたと答えてくれるようになりました。

こうした変化は、最初は顔と名前しかわからなかつた子ども達に対して、「よい数学の授業をしよう」と指導案を作成していたのが、そのクラスの子達は、数学が好きか嫌いか、数学の授業ではどんな態度を取っているのか、問題に取り組む際にはどういう姿勢でいるのかなどを授業の中で少しずつこちらが理解していくことで、「このクラスの子達のためによい数学の授業をしよう」と指導案を改善していった結果が生んだものだと思います。こうした教師と子ども達の授業に対する認識のずれや一致は数学教育では「教室規範」という名で呼ばれます、一朝一夕で教室に形成されるものではありません。教師と子ども達によって構成されるコミュニティにおいて様々な議論が行われることで徐々に出来あがっていきます。そこには私が経験したような教師と子どものずれ、また子ども同士の考え方の違いがあり、何度も意見を交換し互いに認め合う中で歩み寄っていくというものです。

こうした私自身の経験から、実習生には少しでも長い時間を子ども達と過ごせるようにすることが、よりよい教育実習への第一歩だと考えています。特に数学教育では、学習指導要領においてコミュニケーションの重要性が述べられ、教室全体で数学を創り上げることが望まれていることから、実習生は指導者としてだけでなく、調整者としてその場を取りまとめることも要求されます。故に、子ども達のことを理解する時間を少しでも増やすことが、実習生のためになることは言うまでもありません。

その一方で、現場の先生方は4週間という長い期間の指導を行うことになり、負担をかけていることは無論承知していますし、むしろ大変なのは実習生が帰った後の4週間分の授業の取り戻しだということも私自身の経験から理解しています。故に、これから教育実習に期待することとしては、大学や現場から要請するだけでなく、共同参画として愛知教育大学の教育実習を創り上げることであり、実習生や子ども達の目線に立った新しい実習の形を模索することだと考えています。



## 教育実習に期待すること

幼児教育講座 新井 美保子

幼児教育選修学生の4年間は忙しい。幼稚園と小学校教諭免許状に加えて、全員が保育士資格を取得する。現在、名古屋市立幼稚園以外の県内全公立園（幼・保）は、保育士資格無しでは採用試験を受験できず、学生にとって幼稚園教員免許状は保育士資格とセットになって初めて効力を發揮する。昨年8月に可決された「子ども・子育て関連三法」においても、今後増加すると考えられる「幼保連携型認定こども園」の職員は「保育教諭」とされ、幼稚園教諭免許状と保育士資格の併有を原則とし、公立職員の場合は教育公務員としての取扱いになる。今後は益々、幼保小の連携と、幼保小それぞれでの実習経験が重要になってくると言えるだろう。

幼児教育選修学生は、今年度の場合、4年間で8種類の実習を経験する（応用実習は一部の学生のみ）【表1】。1、2年生では、保育者及び実習生としての基本的姿勢や態度、幼・保・児童福祉施設それぞれの役割や一日の流れを理解する。加えて、保育所では0歳～年長組に順々に実習に入ることで、乳幼児の発達について全般的に理解を深め、施設実習では障害児への援助を学ぶこともある。

表1 幼児教育選修学生の実習の種類

種類	学年・時期・期間
介護等体験（特別支援学校）	1年・6月・2日間
基礎実習（幼稚園）	1年・9月・2日間
保育所実習Ⅰ	2年・9月・2週間
児童福祉施設実習	2年・春休み・10日間
保育所実習Ⅱ	3年・6月・2週間
主免実習（幼稚園）	3年・10月・4週間
隣接校実習（小学校）	4年・6月・2週間
応用実習（幼稚園）	4年・11月・1週間

3年次からは、指導案を作成して部分実習や一日担任実習を経験していく。運動、造形、音楽活動の他、言葉遊び、自然との関わり、室内遊び等を教材研究し、計画して実践する。さらに、朝の受け入れから、昼食指導、降園指導、けんか・トラブルの仲裁、けが・衛生への対応等まで、幅広く実習し学ぶ必要がある。特に主免実習では、1クラス35名の幼児一人一人を把握し、興味・関心・発達状況に応じた適切な活動を予想して環境を構成し実践していく技能を学ぶ。自由遊び（好きな遊び）は、子どもにとって探究活動、問題解決学習であり、「ねらい」をもって援助していく指導力は、この主免実習なくして学べない。こうして学生たちは、必死で実習を積み重ねてクラス担任としての力量を身につけていく。

4年次の小学校実習多くの学生が実習する。私自身はかつて、奈良女子大学附属幼稚園で4週間（1+3週間）、同附属小学校で2週間の実習を経験した。特に小学校では、ジャンケンに負けて実習生を代表して特研を行ったが、今としてはとても良い思い出になっている。「アニメの曲に合わせて手作り楽器を演奏する」という私の突飛な構想に対し、2年生の担任の斎藤先生（専門は算数）は「こんな授業を私もしてみたかった。好きなだけ授業時間を使いなさい」と励まして下さった。ちなみに、子ども達の1番人気の曲は16ビートがかっこいい「ルパン三世のテーマ」、次いで「アルプスの少女ハイジ」であった。演奏する楽しさ、子ども達の可愛らしさ、そして授業と共に創り上げることの面白さ。指導教員に守られ交流しながら、子どもの魅力を発見し、教職（保育職）の面白さを知る。これこそが実習での学びであると思う。



## 教育実習に期待すること 一 特別支援教育実習

理事／副学長 都築繁幸

### 1. 自分自身の体験を振り返って

1971年から1975年まで本学の養護学校教員養成課程中学校コース（社会科免許取得）で学んだ。教育実習は、3年生前期に附属岡崎小学校で2週間（副免）、4年生前期に附属養護学校で4週間（主免）、4年生後期に刈谷市内の中学校で4週間（基礎免）行った。愛知県西三河地区の小学校に県下ではじめて情緒障害特殊学級を開設することになり、愛知県教育委員会の要請により大学3年の時から週1回、担任補助者として出向くようになった。この経験が卒業まで2年間続いた。この2年間の体験が特別支援教育における学級経営論、教育課程論等を考えていく上では、教育実地研究としての10週間の教育実習よりもはるかに貴重なものとなった。

### 2. 総合免許状としての「特別支援学校教諭免許状」

従来、盲学校・聾学校・養護学校ごとに分けられていた教員の免許状は学校教育法等の一部改正（平成19年4月施行）により、特別支援学校の教員免許状に一本化された。各障害の教育領域の必要単位数を修得し、特別支援学校で実習すれば、特別支援学校教諭免許状（視覚障害者教育領域、聴覚障害者教育領域、知的障害者教育領域、肢体不自由者教育領域、病弱者教育領域の5領域）が取得できる。聾学校で3週間の実習をすれば、すべての障害者の教育分野が指導できることとなる。

### 3. 教育実習で身につけて欲しい資質、能力、姿勢等

改正後は、総合免許状であるが故に聾学校の実習をもって盲学校、養護学校の実習を行ったものとみなされるようになった。教育実習生が自戒すべきことは、以下の点である。

- (1) 「合理的配慮」は、障害の種類に応じて異なる、ということを自覚する。
- (2) 学校免許としての「特別支援学校教諭免許状」であり、教育免許としての「特別支援教育免許状」ではない。特別支援学校で教育実習を行ったからと言って特別支援学級の実習を行ったことにはならないことを自覚する。

### 4. 身につける方策等

- (1) 抹消系障害に対する実習として盲学校又は聾学校で2週間、中枢系障害に対する実習として知的障害養護学校又は肢体不自由養護学校で2週間、というように異なる学校種で4週間は実習を行い、「障害の種類の応じた専門性とは何か」を考える契機とする。
- (2) 特別支援学校教員養成課程の学生にあっては、小学校又は中学校の通常の学級を2週間、特別支援学級を2週間、というように異なる学級種で4週間は実習を行い、「一般的配慮と特別支援的配慮」の両方を身につける契機とする。
- (3) 特別支援教育は、「障害教育」であり、「生涯教育」もある。特別支援学校教員養成課程の学生は、特別支援学校で実習を行うことから「特別支援学校2日間、社会福祉施設5日間の介護等体験」が免除されているが、この体験こそ必修化すべきである。学校教育機関で支援が終了するものではないことを自覚する契機とする。

